

日々である。

帰国後五十数年を過ぎた今日、いまだに年一、二回シベリア抑留中の夢を見るのである。いかに三年八月のシベリア生活がつかったか。「ダモイ」帰国の言葉を信じ抵抗もなく連行されて以来、苦しみ、諦め、そしてなお生きようとした悲しいまでの人間の姿。望郷の念に支えられて生き抜いた困苦欠乏の日々を私は終生忘れないであろう。

【執筆者の紹介】

現住所 鳥取県八頭郡用瀬町鷹狩

大正七年九月一日生

学歴 高小卒

軍歴 昭和十三年一月十日

現役兵として
鳥取歩兵第四

○連隊入隊

昭和二十年二月一日

任 陸軍准尉

昭和二十年九月十日

蘭崗 武装解

除

昭和二十年九月二十五日 入ソ ムリ

收容所

昭和二十四年七月二十日 英彦丸 舞鶴

復員

職歴 復員後 農協職員

農協退職後 社会福祉協議会勤務

同右退職後 用瀬町老人クラブ連合会長

軍人恩給友の会会長

現全抑協鳥取県連合会用瀬町支部長

叙勲 昭和六十五年 勲六等瑞宝章受賞

(鳥取県 松下 盛一)

抑留記

鳥取県 井上平夫

内務人民委員部チタ監獄に収監

シベリアの最酷寒期は万物が凍る。昭和二十四(一九四九)年二月二十二日(火曜)暗くなって作業から

帰る。食堂で塩汁を啜っていると大声で「田中君はいないか」。振り返ると本部の日本人がソ連将校と入口に立って見回している。返事をすると「すぐに荷物をまとめて本部に来い」と言う。覚悟はしていたが「いよいよ来たな」と頭から冷水を浴びせられた思いがする。塩汁啜りもそこそこにバラックに帰り、荷物（岡部大佐から別れるときに頂いた将校用の冬軍衣・袴）とぼろ切れを袋に詰め、指定の日本側本部員とともにソ連将校の部屋に行く。部屋には目つきの悪い将校が三人待っており、鋭い目でジロリと見る。将校の大きな肩章は黒く、階級は大尉中尉の星数だ。これが内務省保安部所属のカーゲーバー（KGB）だ。日本人の本部員が「田中を連れて来た」とソ連に引き渡す。将校の一人が「田中か」と尋ねる。「ダー（そうだ）」と言うと、他の将校が小生の腕をつかまえて、外に待機させていた黒塗りの乗用車後部席に乗せ、両側のドアから挟み込むように将校が乗る。こんな黒塗りの自動車に乗ったのは生まれて初めてだ。

将校一人は前の席に乗り、運転手に「ダワイイ」と

命じ発車させる。チタの街は街燈はなく暗い。どこへ行くのかどこを通ったかわからない。二十分ほど走行し、歩哨が立っている門の鉄扉を開けて中へ滑り込む。四階建て位のいかめしい大きな建物の前に停まる。下車させ将校が前後について中へ連れ込む。電燈がついて机が並んだ事務所らしい部屋へ入る。中へ入ると将校の態度ががらりと変わり、罪人扱いをする。

再度人定尋問をした後、兵を呼び所持品を全部検査する。服のボタンとホックは全部切り取る。三十センチぐらいの竹製定規は、検査する兵の手から将校が取り上げて自分の机の上の空缶の鉛筆立てに差入れてしまふ。次に着用している服や靴等を全部脱がせ、裸にして口中や股等を開かせ検査する。ボタンや紐を全部切り取る。靴紐も抜いてしまう。留置場で自殺しないための予防措置だろうか。検査が終わって服を着る。指紋を採られる。服のボタンや紐がないので法被はっぴを着たようなもの、前が寒い。ズボンは手で支えないと下がる。靴は紐がないので足が靴の中で踊ってごとごとと歩きにくいことになった。

上衣の襟に縫い込んである小林君の遺骨は発見されず無事通過し安心する。小林君と一緒に牢獄で過ごした方が力強いと将校服を着る。検査が終わると将校三人が何やら話し合っていたが、兵士に「ダワイ（連れて行け）」と命じる。兵士がダワイと歩かせ、事務所の裏側の扉を開ける。荷物を持つと置けと言う。まあ盗まれても惜しいものはない。右手で前を合わせ左手でズボンを持ち上げつつ、監視兵の前をごとごとと靴の音をさせつつ歩く。廊下の突き当たりは鉄格子の扉がある。これぞソ連人民を震え上がらせるカーゲーペーの監獄だと直感する。後ろの監視兵が口笛で合図すると、監視兵が鉄格子の向こうに現れ、応答の口笛を鳴らし錠をはずし中へ入れる。中へ入ると固い音を立てて鉄格子の扉が閉まる。一階の廊下の両側に監房の列がある。監視兵が巡回している。階段の下で二階に口笛で合図すると二階の監視兵から口笛の応答があり、ダワイ（二階へ上がれ）と指示する。階段は靴が脱げそうである。爪先を上に向けつつ一段一段上がる。二階は一方が廊下で、その廊下に面して監房が並

んでいる。各房の扉は緑色に塗ってある。二階の監視兵が中央付近の扉を開けて中へ入れと言う。躊躇していると、連れて来た監視兵が「ダワイ スカレー（早く入れ）」と肩をつかんで臀部に靴をかけて力まかせに蹴り込まれる。その拍子にごとごと靴の片方が脱げる。後は厚く重い木の扉の閉まる音と錠の鈍い音がし静かになる。独房に蹴り込まれた瞬間「お母さん」と我知らずに口に出た。なぜ母を呼んだのか、年老いた母、我が子の帰りを待っている母、監獄にぶち込まれた以上生きては帰れまい。万一帰っても母はこの世の人ではなからう。もう逢うことはできない。母も悲しむであろう。母を思っただけの一言ではなかったか。また一方では、あの地獄のような日本人同胞が相反目した収容所から逃れたとの安堵感も横切る。

入れられた独房は、廊下側は間ロー・五メートル、奥行き五メートルくらい。鉄の寝台一個と壊れかけた小さな戸棚、それら入口近くに用使用の小桶がある。一番奥の壁の上の方に鉄格子付きの小窓がある。壁は白一色であり、天井から薄暗い裸電球が一つぶら下

がっている。眼が慣れて判別できるほどの明るさだ。

寝台に腰掛けて放心状態でいると重い錠を外す音がし、扉を開き毛布一枚投げ込んで「スパーチ スカレー（早く寝ろ）」と言う。眠れそうにないがそのまま毛布を被って寝台に横になる。眼が冴えてくる。監視兵が巡回する靴音が耳につく。新入のためか度々覗き穴を開けて監視している。その度に廊下の光が一条独房に射し込む。連行されるときにはどこかで処刑されるかも知れないとの恐怖心もあったが、監獄へ収監したところを見るとそれもなさそうだ。生への執着がむくむくと湧く。生きれるだけ生きるぞ、これも一つの人生経験だと凶太い気持ちになる。

うとうとしていると急に監視兵が扉を叩き「起きろ」と言う。次々に監房を叩いて回る。朝らしいが独房の小窓から見える空は真っ暗だ。星が二つ三つ瞬いている。しばらくすると一方の監房から扉を開けて廊下をバタバタと足音が独房の前を往復する。何をしているのかわからない。小生の独房の番になり、扉を開け監視兵が「ブイストレ（早く）」と言う。廊下へ出

ろということらしい。廊下へ出ようとすると、「バラシー ダワイ（便桶を持って）」と指示する。便桶の処理だなと気づく。桶の水がこぼれないよう歩くと「ブイストレ（早く）」と言う。便所で捨ててまた新たな水を汲む。便所で用便しようとしても「ブイストレ ブイストレ」とせき立てる。落ち着いてできない。桶を携えて独房へ帰ると後ろで扉の閉まる音がする。

全房の便桶の掃除が終わると、扉の中央にある小さな差入れ口の蓋が開き「ナァー（そりゃ）」と小さな黒パン二五〇グラム位を差し出す。パンの配給が終わると再度差入れ口を開け、「チャイ（お茶）」と言い、「カチローグ（飯盒） ダワイ」と言う。「ニエット（ない）」と答えると差入れ口を閉めてしまう。しばらくするとソ連軍用の丸型の飯盒に白湯を入れて「ナァー」と言って差し出し口から差入れてくれる。ソ連では白湯がお茶かと苦笑する。配食が終わると監獄は元の静けさに戻る。後は監視兵が時々覗くだけである。収容所は塩汁にキャベツの下葉が二―三切れ浮いていたが、監獄は白湯だけだ。黒パンは膨れないの

で二五〇グラムは子供の拳程だ。それと白湯で朝食は終わる。

監獄は六時起床、二十二時就寝である。監獄には強制労働がない。日本人同士の吊るし上げもない。その点気が楽だ。何もすることはない。寝台に横になって天井の白壁を眺めていたら、監視兵が差入れ口を開けて「ネリジャ スパーチ（寝たらいけない）」と叱る。寝台に腰掛けておれと言う。寝台に腰掛けると前の仕切り壁まで四十―五十センチ、白壁と睨み合う。昨夜の寝不足で居眠りがつく。寝台を引き寄せて前の壁に額をつけて眠る。また監視兵が注意する。寝台を元の位置に戻して四十―五十センチの通路を作り、動物園の熊のように行ったり来たりの歩行をする。歩いていくることについては監視兵は何も言わない。

昼になったのか、差入れ口を開けて「アベータ（昼飯）」と言ひ、飯盒を要求する。飯盒には塩汁の底に燕麦が十粒程とキャベツの刻んだものが浮いている。熱湯でしばらく冷やさないと飲めない。食事が終わっても水腹ですぐに空腹になる。暇と空腹を紛らわすた

めに幼児からの思い出をたどるが、行き着くところはあのときの祭りにはあんなごちそうがあった等食い物のことと、母や肉親の思い出に帰ってしまう。また熊のまねを始めて歩く。薄暗くなる頃に夕食を配る。「カーシャ（粥）」と言ひ、飯盒に小杓子に一杯入れてくれる。水に燕麦が少し浮いている薄い重湯に似たものである。パンは朝だけである。

夕食の分配が終わると監視兵は交代するようだ。廊下に交代要員が来たのか賑やかになり、二人で覗き穴から人員を確認している。夜も便桶の水の取り替えを急がせる。これで一日の行事は全部終わったらしい。廊下は静かになる。

夜十時頃、監視兵が鍵で扉を叩きながら「スパーチ スパーチ（寝ろ寝ろ）」と各房に告げて回る。消燈はしない。寝台に横になってもよいと言っただけである。毛布にくるまって横臥する。昨夜入獄第一夜の興奮で寝てないので今晩は眠い。睡魔に襲われようとしたところ首が痒い。手で掻くと潰れた南京虫特有の臭いが鼻を突く。起き上がったって薄暗い電燈の光で壁や藁布団

の上を見ると、南京虫がゴソゴソと逃げる。爪で潰すが逃げ足が早い。二、三匹潰せば豊漁だ。そのうち一匹生け捕る。戸棚の天板の傷のへこみの穴に入れ、その上に飯盒を載せて南京虫を収監しておく。横になっているとまた襲ってくる。虫まで我を苦しめるのか。安眠できない、これもソ連の拷問の一つかと憎い。

扉を叩く音に起こされ今日も単純の一日が始まる。

昼過ぎに扉が開けられ出ると言う。そのまま出ると手を後ろへ組めと言う。上衣の前が開き法被になるが、ズボンは後ろに組んだ手で下がらないように支えて歩く。階下に降り指示するとおり歩く。風呂場に着く。

入浴らしい。チョコレイト色のキャラメル位の大きさのものをくれる。軟らかい。何かわからない。風呂に入浴するといってもタオルもない。入浴だと告げられておれば何か代用の布でも用意できたのに、やむを得ない。服を脱ぎ裸で入浴室へ。監視兵が何か言っているがわからない。先程くれたキャラメル様ものを見せて体や顔を洗う仕草をする。ああ石鹸だと知る。それにしては小さいし黒く品質の悪い石鹸だ。お湯を洗い

桶に八分目くれる。顔を濡らし髪に石鹸を塗ったら一カ所でべたりと付く。髪を手で洗ったら石鹸は溶けてしまい体を洗うことができない。手で体を擦り、残りのお湯を頭から被って終わりである。監視兵が一挙手一投足を監視している。浴室から出たらそれでも風呂上がりのような気分になる。浴槽でゆっくりと浴したい気持ちになる。

昨夜捕らえた南京虫を取り出して天板の上を遊ばせる。初めは元氣よく暗い方へ暗い方へと逃げていたが、逃げられないことがわかったか疲れたのか、動きは鈍くなり動かなくなる。元の傷穴に戻しておく。余り時間つぶしの遊びにはならない。考えてみれば南京虫といえどもこのような虐めは自分達の縮図のようでもある、夜の便桶の掃除に出たときに便所に捨てた。

監獄内に医務室があるようだ。女医が一度巡回した。ただ房内に入り室内に一回り眼を走らせて出て行く。収監者の健康状態を診るでもない。それでも中尉の肩章を付けていた。

七日目の夜、就寝していると錠をがちやがちやする

音で眼が覚める。監視兵が「出ろ」と言う。廊下に出ると手を後ろに組めと言う。指示する方向に歩く。監獄の鉄格子扉を出て別棟の二階へ連行され一室へ入れられる。室内には中尉（カーゲーバー）が木製の正面椅子に座っている。その横に背広を来たロシア人が座っている。取調室であると直感する。机から二メートル位離して中尉と相対して置かれた粗末な椅子に座らせる。目つきも感じも悪い中尉だ。

この中尉が威圧的に何か宣言する。中尉の横のロシア人が日本語で「これからあなたの取調べを行う。嘘や偽りを言うとなソ連刑法によって罰せられます」と通訳する。日本語が流暢であるのに少々驚く。型どおりの人定尋問である。氏名・生年月日・出生地・軍隊歴・地位・勤務年数・軍隊での任務等を通訳を通して聞く。答えると通訳と取調官の中尉はそれを記録していく。通訳と相談しながら書いたり消したりで時間がかかる。軍歴については二十三年に伴さんに作成してもらったとおり一般部隊だと供述したところ、取調官は「虚偽の供述だ」と怒り睨みつける。「真実を言え。

お前が幾ら隠しても当方の調べがある。調査はついている。隠してもこのように証拠がある」と、ロシア文字で書いた紙を振って見せる。恐らく文化部や積極分子等の日本人が作成し、前職者を密告したものである。通訳がそれを見ながら日本語で聞かせる。よく調べている。捕虜収容所で寝物語で語り合ったことがほとんど筒抜けになっている。今さら悔いても後の祭りだ。「それだけ調べてあれば改めて取り調べる必要はなからう」と言うと、調査官は「そのとおりだ」とニタリとする。今晚はもうよいと監視兵を呼んで独房へ帰す。夜は半分更けている。

朝六時には起こされる。日中は独房の中を熊のように往復する。午後突然扉が開く。「出ろ」と言う。昼間の取調べかと、監視兵の言うとおりに手を後ろに組んで歩く。屋外に出され、高い板囲いの中へ入れられる。広くはないが陽が当たって空気もきれいだ。長いトンネルから抜け出たような気分だ。空気がうまい。深呼吸する。塀内の限られたものとは言え、大空が見えるのが嬉しい。望楼の監視が腕を丸く振って囲いの

中をぐるぐる回って運動しろと合図している。囚人の運動場だ。すがすがしく感じる。独房の中を熊のように回るより、大分広く太陽の光を浴びることができているのがよい。立ち止まると望楼の監視兵がダワイダワイとうるさく回らせる。

当初気がつかなかったが、板扉に硬い石かガラス破片で落書きがしてある。監視兵の目を盗んで書いたものであろう。中には日本人のものもある。監視兵に気づかれるので立ち止まって読むことはできないが、ソ連に対する怨みや祖国日本の繁栄を願うもの等の短い文章であった。落書きではなく血の叫びである。前職者が逐次引き抜かれていたのはこの監獄だったのか。取調べられ判決後どこかへ行ったのであろう。

雨の日以外は毎日屋外運動をさせるようになる。一日の唯一の楽しみになる。雨後の水溜りを鏡代わりに顔を映して見る。土色でよくわからないが、髪や髭が伸びている。二十〜三十分位で独房へ連れ戻される。

就寝時間後また取調べに呼び出される。前回の続きだ。あれだけ密告調査してあれば白白してもしなくて

も同じだ。また当方の供述を通訳が正しく取調官に伝えていいのか、伝えたとしても取調官がそのとおり調書を作成しているのか疑問だ。取調官は罪人を作れば自分の功績になるし、ノルマの遂行にもなるらしい。ソ連のカーゲーベーに捕まって無罪になった者はいないという噂がある。隠しても同じ結果しか生まれない。なるようにしかならないと割り切るといふか、自暴自棄というか、大体の事実を言っただけと決める。

この日以降、連続した夜間取調べがあったり、十日位休んで再開したりのリズムである。早く終了しないかなあと思うがなかなか終わらなと言われない。取調べの大体の内容は次のようなものであった。

問 特務機関に勤務したのは自ら進んでか。

答 命令である。

問 お前に特務機関を命令したのは誰か。

答 連隊で命令を受けたので連隊長であろう。

問 お前は軍隊へ志願して出ているが、三つ子の魂

百まで（通訳がこの諺を使ったのには驚いた）

という諺が日本にあるが、子供の頃から軍隊が好きであったか。

答 子供の頃はよく兵隊ごっこして遊んだ。そんな時代であった。

問 軍隊に入ったらソ連を攻撃してやろうと思っていたのではないか。

答 その頃はソ連という国がどんな国かは知らなかったし、ソ連を攻撃するというようなことは一兵卒が考えることではない。

問 特務機関の編成、諜者の氏名。(紙と鉛筆を渡し、明日提出せよと言う)

答 昭和二十年には編成替え等で増員されたが、第一線勤務していたため詳知していなかった。

問 (昭和十七年当時の編成を書いて提出)
諜者の投入回数。

答 数えていない。

問 編成・服装。
答 満州国警察官服で三人位。
問 成果。

答 外蒙軍の配備。

問 外蒙諜者の逮捕。

答 直接逮捕したことはない。

問 諜者取調後の処置。

答 直接扱ったことがないが、取調べが終わったらごちそうしてやっていたようだと言った。優遇を仄めかす。

問 ごちそうには酒も出るか。

答 知らないが出るかも知れない。

問 どんな酒か。

答 恐らく支那酒だろう。

問 強い酒を飲まして酔ったところを殺すためだろう。

答 (酒にこだわると思ったら、殺したという罪を作るためだと内心思う。) 殺すためではない。慰労のためだろう。その証拠に、諜者は一カ所に収容され楽しく生活していると聞いた。

余り諜者のことにこだわるので話を交えてやれと思
い、取調官に「ちょっと質問してよいか」と了解をと

り、「私はさきに供述したとおり、外蒙古に対しての諜報には携わったが、ソ連に対しては諜報も防諜もしていない。なぜソ連の取調べを受けねばならないか」と逆に尋ねた。取調官は通訳と何か話し合っていたが、「ソ連邦と蒙古人民共和国（外蒙古）とは軍事同盟と相互援助条約を結んでいる。外蒙古に対するそれらの行為はすなわちソ連邦に対する行為とみなす。それだからソ連が代わってお前を取り調べているのだ」と通訳を通じて言わせる。「では、なぜそんな罪になる諜者派遣をソ連も外蒙古も行うのか。満州国にはソ連から外蒙古からの諜者がほとんど投入されたり、武力をもって住民や国境監視兵を拉致する事件をたくさん起こしたではないか」と聞くと、「それは観点が違う。ソ連邦や外蒙古は世界の抑圧されているプロレタリアートを解放するために、必要なことを調べる目的で諜者を派遣したり住民を拉致するのだ。これは正義の行為である」と説明する。これは收容所で積極分子（アクチーブ）連中が称えていた理論と同じである。「それではソ連や外蒙古の行為に他の国が防衛対策を

講じたらいけないということか」と訊く。「そうだ、そのとおりだ」と言う。「他の国々には国の権威を認めないということではないか」と反問すると、「ソ連の知ったことではない」と一方的な幼稚極まりない論である。開いた口が塞がらない。この論議で「日本新聞」編集の日本人と民主運動の積極分子が指導されていたのだろう。收容所の積極分子の論調と同じで独善的なものだ。この論で世界を支配しようとする思想こそ恐るべきものである。積極分子はその手先として活動しているに過ぎない。

あるとき、取調官が「お前は日本帝国主義、資本主義の手先だ」と言う。誰でも生まれた国の一国民としてその制度の中で生活成長する。「手先ではない。善良な国民だ」と反論する。「資本主義は社会主義の敵である。その資本主義に加担し、兵隊として勤務したことは手先だ」とソ連の理論だ。「ソ連刑法には資本主義援助の罰則がある。だから資本主義援助の罪で罰することもできる」と。「それは社会主義国ソ連国民に対するもので、我々のように資本主義の国民には該

当しない。あなたの論ではソ連国民以外は皆罪人にする
ことができるではないか」と反論したが、「ソ連に
捕らわれた者には適用する」と言う。日本人抑留者は
全員罪人にすることができると、無茶苦茶な論議であ
る。我々最後まで人質として残された捕虜の中に、資
本主義援助の罪により罰せられた者が幾人かあった。

取調官は取調べの途中、夜十一時半頃になると、
ちよつと家に帰ってくと部屋を出て行く。後は通訳
か監視兵を呼んで監視させる。二時間位帰って来ない
こともある。通訳は夕食だろうと言っているが、夕食
後夫婦の睦言でもしているだろう。

通訳は当初中年の男で、背の高いロシア人で日本語
の上手な人であった。監房内に起居しているらしく、
一々取調官の許可を受けてから席を立てていた。ある
ときも許可を得てパン工場へ行き、裸の黒パンを一本
抱えて帰ってきた。一般の通訳なら一々許可を受ける
こともなかりうに。小生が既決後一緒になった日本人
から聞いたところによると、彼は白系ロシア人で、日
本に亡命し毛織物等の行商をして日本各地を流れ歩い

ていたアンドレーエフと言う者であるということであ
った。彼も日本人の取調べが一段落したところで用
済みとなり、処刑されラーゲリ送りになったらしい。

一時ロシア人の通訳に代わって、頬骨の張った色の
浅黒い、蒙古人特有の顔をした二十五、六歳の女性中
尉の通訳に代わる。日本語は余り上手ではない、たど
たどしい。取調官が夕食をして来ると言って帰る。通
訳と二人だけになる。この女性通訳は途中交代のため
今までの調べに対して知らないらしく、「何をしたの
か」と聞く。「特務機関に勤務して蒙古人と一緒に生
活していた」と話すと、頷きながら何か同情的な顔を
する。「この監獄に日本人が収監されているか」と問
うと、他をはばかってか、言葉でなく日本人がいると
いう素振りをする。「あなたは蒙古人と見たが、ブリ
ヤート蒙古人か」と問うと笑っているだけだった。
「日本語はどこで習ったのか、とても上手だ」とお世
辞を言うと、嬉しそうである。一番関心事である「外
蒙に対する謀報行為は罪になるのか、なるとすると何
年位か」と問うと、いかにも言いにくそうに、「三年

かな、四年位かな」と、気の毒そうに蒙古語で答えてくれる。「老いた母が帰りを待っているのだが、母が生きているうちに帰国できるだろうか」と問う。通訳は答えなかったが、何か暗い顔をしたような気がした。この蒙古人は四、五回の取調べの通訳をしたが、また元の男の通訳となった。それ以後この蒙古人の女性通訳には逢うことはなかった。

取調べが終わると、その日その日に供述書を読み、通訳が日本語に訳して記述内容を知らせ、間違いないことの署名をさせる。初日は人定調書であり署名する。二回目以降の謀者の派遣または外蒙謀者の逮捕・取調べについては、調書に記述以外にどのようなことを書いていくかわからない。後で読んで聞かすときはそれらの所を抜いて通訳しているかも知れないので署名を拒む。取調官は、通訳が日本語でお前に聞かせたとおりだと言って署名しろと強要する。署名しないと拒むと厳しい顔をしている。机の引出しから拳銃を取り出して、机の上に置いたり布で拭いたりして暗に威嚇する。「お前は第一日目に虚偽の申し立てはしない

と申立書に署名したではないか。その署名は自後の調書に生きている」と言う。「申立書は虚偽の申し立てをしないという署名であり、調書に申し立てどおりに記述されているか否かはわからないから署名しない」と反論する。「供述のとおりに記載している。早く署名しろ」と迫る。拒否を続けたのでその夜は独房に帰される。

取調べの終わりに署名を強要する。「お前が署名しようが拒否しようが調書の効力は同じことだ」とも言う。「同じことなら署名を強要することはないではないか」と突くと、「もしお前が供述調書に不服があれば、裁判が行われるときに裁判官に言えばよい」となだめたりおどしたりする。深夜までの取調べから独房へ帰っても寒さと南京虫、取調べのこと等で頭が冴えてなかなか寝付かれない。いつもうとうとする頃に起床時間となり叩き起こされる。寝不足で頭がぼーっとしている。白い壁と腕めっこしていると思考力も変になる。監房の壁積みは素人が囚人であろう、壁が凸凹しているため埃が積もっている。白い色は消石灰を溶

かして塗ったもので、接すると白く付く。消灯後寢床に臥してからも廊下を歩く監視の足音が耳につく。監房の前に止まって取調べの呼び出しをするのではとビクビクする。

手は下さないが、食事の粗悪による肉体的、深夜の取調べによる精神的、寝不足等、拷問だ。監房の給養は収容所よりさらに質量とも悪い。しかも座っていて余り動かないので、特に下半身の腰から下が瘦せて骨と皮になる。

収監されて約二カ月の四月下旬、消灯近く突然扉が開く。ソ連人の囚人らしい者が押し込まれた。しばらくして寝台が持ち込まれる。狭い監房がさらに狭くなる。縦に前後して並べる。便桶は寝台の下に入れ、用の時々を引き出して使用する。明日から房内の歩行運動が交代交代でしかできなくなる。先入者の小生に対し一言の挨拶もしない。消灯後寝台で、なぜこんな狭いところに二人を入れたのだろう、ソ連取調官のスパイか、それならば言動に用心しなければならん、それとも逮捕者が多く、監房が足りないためか等々を想像

しているうちに眠ってしまう。

翌朝から監獄での行動が一緒になる。朝食を終えてしまえば暇である。彼は「お前は日本人か朝鮮人か」と聞く。「日本人だ」「お前はロシア人か」と聞く。「アルメニア人だ」と答える。彼が手足を使ったジェスチャーで語るところによると、独ソ戦に従事し、独軍の捕虜になった。独軍の収容所で軽い労働をさせられた。独軍の旗色が悪くなり、連合軍がドイツに攻め込んで捕虜は解放され、米軍管理に移った。米軍の収容所では食糧は豊富で、生まれて初めて白パンを食べ、牛乳・砂糖・肉等ともに好きな量を食べ、空腹を感じたことがなかった。その上ソ連では珍しかったチョコレートやココアや果物の缶詰を支給された。労働は収容所の自活のためのもので、軽作業であったと、独・米の捕虜収容所を褒めていた。

ドイツが敗北で終戦となる。しばらくしてソ連のスターリンの写真入りのチラシが収容所に配られた。それには「あなた達は独ソ戦で祖国ソ連のために勇敢に戦った勇士である。不幸にして独軍の捕虜になった

が、ソ連国はそのことを少しも責めることはしない。ソ連軍の英雄として迎えるので祖国に帰って来て欲しい。あなた達の親・妻子・兄弟が皆待っている」との内容であった。米軍の収容所では、両手を挙げて喜ぶ者と、これは捕虜を帰国させるための宣伝であり帰国すれば監獄にぶち込まれると危惧し、それより生まれ初めて見るこの物資豊富な国に残って生活を希望する者とに分かれる。彼も遅疑したが、親兄弟に逢いたいため帰国組に加わった。残留した者も半数いたのではないかと言っていた。その後、残留組がどうなったかは知らないとも言っていた。帰国組を迎えに来たソ連船には軍楽隊が乗船しており、帰国組を勇ましい音楽を奏でて迎えてくれた。船内の食事は米軍より随分劣っていたが、帰国の喜びでいっぱいであった。しかし船がリガ港に入港し上陸してみると、銃剣を持った兵隊が配置されて異様な雰囲気だった。下船が終わると鉄道に待機している有蓋貨車に詰め込まれ、扉に重い錠をかけられ警戒兵監視のもとに列車は東へ東へと走り出す。このときにあのスターリンの写真入りのチ

ランの名文句との大違いに欺かれたと悔いた。ドイツの米軍捕虜収容所に残った連中の賢明だったことを羨むがどうにもならない。一週間位して停車場に逐次四〜五人ずつ下車させながら東進し、本人はシベリアの炭坑のある一寒村に下車させられた。残った者も同じく分散させつつ下車させたであろうと言う。一カ所に集めると暴動を起こす恐れがあるためであろう。

彼はここで一般労働者として炭坑労働に従事させられた。独・米軍捕虜の優遇されたことを政治部員から敵しく口止めされたと言う。政治部員も独・米の物資の豊富で生活しやすいことを知っていたらしいと笑っていた。この炭坑の町での行動は比較的自由であった。パスポート（ソ連人は全員所持する身分証明書）は短期のもので、期限までに役所へ出頭して逃亡してないことの確認をとり、書替えしなければならなかったと言う。ソ連では旅行するときは事業所の許可証明とパスポートを提示しないと切符を買えない。

この町でウクライナからの強制移住者（独軍がウクライナを占領したとき反独パルチザンに加わらなかつ

た村、ソフホーズやコルホーズの桎梏しごくから逃れようと
独軍に協力した村等は、戦後村ごとに時間を切つて集
合せ、貨車でシベリアへ移動され、家族も村もばら
ばらに逐次各所に下車させたの娘と一緒になり、二
人で稼いで何とか穏やかに生活していた。一九四七年
冬、炭坑労働を終えて帰宅途中KGBに連行されてこ
の監獄にぶち込まれたと言ひ、罪状は独軍の捕虜とな
り独軍のために働いたこと、米軍の待遇を喪めたこと
がソ連刑法に抵触し、十年の刑を受けラーゲリに送ら
れた。二カ月で再度同じ罪状で監獄に送り返され、今
度は二十五年の矯正労働と五年の市民権剥奪の刑に処
せられた。妻は婦宅しないのでどこへ行ったのかと心
配しているだろうと寂しそである。同一罪状で二度
も判決があり、さらに重刑にされるとは驚きである。
不可抗力で捕虜になり、米軍から受けた事実を言った
だけで二十五年プラス五年の刑務所入りとは驚く。極
刑だ。それを聞いて自分の刑が気がかりになる。こん
なソ連で二十五年も生き延びることはできない。

彼は監房の間仕切り壁をコンコンと叩く。向こうの

監房からもコンコンと叩いて応答する。初めて監房間
のモールス信号があることを知る。今までの一人のと
きに隣からコンコンと叩く音はしていたが、隣の者が
何か退屈凌ぎの遊びと思つていた。窮すれば通ずるも
のだと感心する。彼は右隣の房には日本人だとか、左
隣には何国人と何国人が幾人いると言ひ。二、三日し
てから左隣にウクライナ人が入つたと言ひ。叩く音
や音の間隔などで分かるのだろうか。経験者でない
と分からないはずだが。

あるときは毛布の縦糸を抜いてそれをつなぎ、一方
の端に印をつけた小さな紙を結ぶ。何をするのかと見
ていると、小生に覗き窓のところに立つて監視の足音
を聞いておれと言ひ。彼は後ろの寝台の上に立ち、高
い小窓から外側に紙を結んだ糸を背伸びしつつ逐次垂
らして行く。一階の監房の高い小窓の扉の鉄板は上向
きに外側に開けてあり、うまく行くと糸がその鉄板を
伝わつて中へ落ちる。

風のある日は不可能だが、無風ならば可能性はあり
得る。紙が軽くて連絡できないようであった。次の

日、外の運動に出たとき小石を速やかに拾って帰房、石をつけて連絡糸を垂らしたが成功しなかった。いろいろな連絡方法を考えているものだ。我々は思いもよらない。彼は毎日壁を叩いたり暖房用のパイプにアルミコップをつけて子供の電話遊びのように小声で連絡をとり合っていた。

彼の話によると、この監獄の大部分は日本人ではないかと言う。日本人も二十五年の刑を受けて逐次強制労働収容所（ラーゲリ）に送られていると言う。あんたも日本人だから二十五年の刑は間違いないと言う。そんな大物ではないと否定すると、彼は、大物小物の関係なく、ソ連のKGBに捕まったら皆二十五年さ、KGBに捕まった者で無罪で放免された者は革命以来ないよと、人の苦悩を知らぬように自暴口調で言う。本人もその経験者である。

この二十五年を聞いて奈落に突き落とされたように感じる。二十五年もこのような地獄には耐えられない。万一耐えて帰国したときは五十三歳になっている。昭和の浦島太郎である。母は恐らく帰国を待つこ

となく逝っているだろう。母が息子を案じつつ逝く。

親不幸な子だ。申し訳ない。涙が流れる。ブリヤート蒙古人の通訳が刑期について聞いたとき三年と四年と気の毒そうに言ったのを、三と四年ならば母に逢えるかも知れないと淡い望みを抱いたのに、今は二十五年が本当ならば望みはない。あの通訳は二十五年の刑は知っていたが気の毒に思って三と四年位と言ってくれたのであろう。彼女の同情心に感謝に似た気持ちがある。しかし、自分が行った戦前の行為が二十五年の極刑に値するのかと自問自答してみるが答えは出ない。独裁国ソ連の恐ろしさを余りにも知らな過ぎたと自分の不勉強を恥じる。

アルメニア人は一カ月ほど同居していたが、急に呼び出され、荷物を持って他へ移動させられた。彼は二十五年に加え五年の市民権剝奪の刑を受けてしょげていた。まあ元気で二十五年務めるんだな、そのうち世の中が変わるかも知れないからと、出て行く彼の背に折ってやった。その後、囚人ラーゲリを転々とさせられたが、彼とは再会することはなかった。よい方に考

えれば、ソ連側が二十五年の刑を事前に覚悟させるために一緒にしたのか。そんな好意はなからう。空き部屋がないためだったろう。ソ連側のスパイではなさそうであった。

彼が出てから思い出したように二、三回取調べがあった。補充取調べのようで簡単なものであった。恐らくもう終わったのだろう。小窓から見る監獄の庭の木が芽が大分伸び、鉛色の重い雲が去って空は青く見える。時々外遊びする子供達のはしゃぐ声が風に乗って聞こえる候となる。

五月下旬頃、昼過ぎに扉が開けられ、出ると促す。取調べかと思つて出ようとすると、毛布と私物を持つてと言う。それらを抱えて廊下へ出る。一階へ降り、中央付近の監房の扉を開け入れる。中には七、八人の日本人がいる監房である。日本人に逢うのは丸三カ月ぶりだ。懐かしく嬉しい。日本語で話し合える。力強く感じる。この監房の人々は取調べが終わって判決待ちという。この監房に移されたことは取調べが終わったことになるらしい。捕虜収容所のように日本人同胞

で相反目し合うこともなく、虐めもなさそうだ。ソ連の悪口であろうと終戦前の話も語り合える。心が晴れ晴れする。どん底に落とされた者ばかりである。ここでも話題の中心は空腹を抱えての食い物の話である。銀飯に刺身、牡丹餅の話が出る。夢では度々牡丹餅を食べたが目覚めると空しい。体力が極限に達しているためか色気の話はほとんど出ない。色気がなくなり、使い物にならなくなったのではと真剣に考える人もある。

ソ連という国は囚人の国と言われるだけあって、囚人の取扱いはよく研究し、人体実験をしている。殺さず生かさずいつも空腹にして、余分なことは考えないようにし、体力を衰弱させておけば逃亡や暴動を起こす恐れもない。スターリンも革命前の経験者だ。

一階の監房の小窓からは庭木のポプラがよく見える。日に日に新芽が伸び、軟らかい若葉が広がってゆく。晴れた日には外の運動場に三、四人に分けて入れられる。監視兵の眼を盗んで板垣いに書かれた落書きを読み、石を拾って自分も書き添えた。旧知の前職者

の名前を見つけることもある。その人の健康を祈る。前職者としてチタ駅で下車させられた連中は逐次自分達と同じ経過を辿らされている。同房にはチタ駅で下車させられた人は一人もいない。なかなか一緒にはしないようだ。計画的に分離しているのだろうか。房の中で大声を出さねば幾ら語り合っても監視は黙っている。

監房の小窓から見上げるポプラも、七月ともなるとすっかり夏の装いである。微風に乗ってサラサラと葉擦れの音が聞かれる。ああ獄中で五カ月を過ごしたなあ、よく耐えたものだ。人間の体の強靱さと順応性を思い知る。

判決の伝達と囚人ラーゲリ

八月中旬頃、昼、一人監視兵に呼び出される。取調べの最終から約三カ月、そろそろ裁判があるだろうと心待ちにしていたので、さてはと監視兵に連れられて行く。いつもの取調室より異なった部屋に入れられる。中央に机一つ、両側に椅子一つずつ置かれてい

る。一方の椅子には男の通訳が座っている。対面の椅子に座らせる。裁判するにしては変だなと、ここが待機室かとも思う。通訳がメモした小さな紙を持っている。

通訳が「これから判決の通知をする」と宣言し、「あなたは「モスクワのソ連邦裁判所軍事法廷秘密欠席裁判において、ソ連邦刑法第五十八条第六項第一号に規定するソ連邦に対するスパイ行為を行ったため、矯正労働二十五年の刑に処する。刑は一九四九年二月二十二日から起算する。上告はできない」旨の判決があったので通知する」。通訳は日本語で読み終わる。

これは驚きだ。ソ連の裁判は、裁判官でもなく取調官でもないただの通訳（受刑者とも聞く）に、こんな重大な人の生死に関わる判決を通知させるのか。この点を尋ねると、通訳は「私は知らない。上司の命令だから伝えた」と逃げる。「取調官は取調べについて不服があれば裁判のときに申し立てればよいと言ったではないか。裁判がなく一方的な調書で判決があったとは騙してはないか」となじっても、「私は知らない、

モスクワから遠いからだろう」とか言つて柳に風だ。「取調官に逢わせろ」と詰め寄つても、「取調官は不在だ」と取り付く島もない。通訳は「これで終わり」と言つて席を立つ。でも可愛そうにでも思つたのか、ポケットから巻煙草三本抜き出して吸えと置いて行く。監視兵がダワイ（帰る）と促す。煙草を吸わないのでそのまま歩きかけると、通訳は煙草を小生のポケットに押し込む。通訳は贖罪のつもりかと、彼の立場も気の毒に思わんでもない。同室のタバコを吸う人のために持ち帰る。

判決後は二階に上げられ、独房に入れられる。未決と既決囚は会わせないらしい。下の監房から毛布や私物を同房者にまとめさせて監視人が運んでくる。その監視兵に通訳からもらつた巻煙草を、下の同房だつた日本人の物だから返してくれと依頼したが、ネリジャー（いけない）と聞いてくれない。いつか日本人に逢つたら吸つてもらおうためそのままにしておく。独房でさきの判決について思う。同房したあのアルメニア人が言つたとおり二十五年を食わせやがつたと

腹立たしく思うが、前もつて覚悟はしていたので余り気落ちがしなかつたが、それでも僥倖を願う気持ちもないではなかつた。決定してしまえば諦めがつく。我が人生は終わったと思う。一方、二十五年間凶太く生きてやろう。浦島太郎になろうとも日本に帰るまでは頑張るぞ。二十五年後は五十三歳になるが、まだ足腰は立つて歩けるだろう。否、杖に縋つても帰るぞ。父や母の墓前に参拜して、ソ連の一方的な処断により帰国が遅くなつたが決してやましいことはしていないことを報告しなければならぬ。ソ連に負けてなるものか。この非人道の国ソ連を日本の人々に知らせなければならぬ責任があると思うと、憤りとともに勇氣が湧く。

判決の通知を受けた夜、入浴させる。監視兵が今回もキャラメル位の石鹼を渡す。洗っていると囚人の浴場係が台の上に立たせる。剃刀で陰毛を剃つてしまふ。剃刀を当てられたときは大事なものを切り落とすのかとひやりとした。理由は毛虱発生を防ぐためと、逃亡したときの目印とか言われていた。監視兵に

せかされ浴場を出る。熱気消毒をした服を着、独房へ戻される。今夜は度々覗き窓を開けて中の様子を監視する。判決後の異状の有無を特に監視するよう命じられていたのか。

判決の伝達があつた翌日の夜半に叩き起こされる。私物を持って出ると言う。今度は一階に降り事務室で人定する。入監したとき取り上げた私物入れの袋を返してくれる。さらに黒パンと塩魚（鮒やニシンの塩もの）を渡す。収監中の量から推測して三日分位だ。遠くの囚人ラゲリに移されるのだろう。監視兵に促されて鉄格子の扉をくぐって外へ出る。八月の夜は涼しい。待機していた保冷庫のような護送用自動車に後部から乗せられる。車内は鉄板で仕切られた個室になっている。その一つに入れられる。外から錠をかける音がする。中は狭く、脛がかえて座れない。立ったままだ。隣の室にも人の気配がする。監視兵は二人おり、最後部の入口付近で監視している。話声が聞こえる。車内は真っ暗である。息が詰まりそうだ。自動車はどこへ向かっているのか分かわからない。揺れる度

に仕切り壁につき当たる。しばらく走って自動車は停まる。下車させない。足がしびれる。ようやく扉を開け外に出される。隣の室から中年のソ連婦人が降りてくる。二人だけである。

裸電球の薄明かりに眼を凝らすとチタ第二駅の引込線の端らしい。線路を跨いで停まっている貨車まで進行される。列車の最後尾に型の異なる黒塗りの貨車が一両連結されている。その貨車の中から降りてきた監視兵に我々二人は引き渡される。貨車の端にある入口から乗せられる。この車両は一方が一メートル位の通路であり、この通路に面して直角に板で三室に区切り、通路に面した方は金網で仕切られ、出入り扉も付けられていた。各部屋は三段の棚が寝台代わりで、各段とも受刑者で満員であつた。小生は中央の男囚の部屋へ入れられる。一番下の棚の床へ潜り込む。婦人は奥の女囚の部屋へ入れられた。室内は異様な臭いである。人いきれと長旅の囚人の垢と汗が混じり合った異臭で胸が悪くなる。日中は貨車の屋根の鉄板が焼けて蒸し風呂のようになる。上段の小窓は半分位しか開か

ないので換気も不十分である。三日分の食糧を奪られないよう枕にして横になる。

二十五年の刑を受けた身、今さら列車がいずれの方へ向かおうと気にはならない。そのうち眠る。朝明るくなると各部屋から「便所に行かせろ」「水を飲ませろ」と監視兵に催促するが、監視兵は「うるさい、静かにしろ」と怒鳴る。囚人は辛抱し切れなく、哀願する者、反対に抗議する者で、喧々囂々と騒々しい。監視兵は自分らの朝食が終わったのか、ようやく扉を開けて二人ずつ便所へ行かせる。便所といっても貨車の隅を仕切って床に穴を穿っただけ、扉もない。監視できるよう開放的である。便所に着いたらブイストレブイストレ（早く早く）と追いたてる。溜まりに溜まった小便や大便、早々には終わらない。張りに張った膀胱が収縮しないのか、尿が出終わった感じがしない。尻を監視兵に叩かれつつではなおさら出難い。男囚の部屋が終わって女囚の部屋へ移る。女囚が男囚の部屋の前を通って便所へ急ぐ。金網越しに男囚の部屋から卑猥な声が飛ぶ。女囚も負けていない。口ごたえ

をして双方がどつと湧く。これが朝晩二回の便所時の交歓会である。両者とも和むひとときである。

ようやく便所が終わって各人ごとに水を一杯あて分配する。監獄で渡された黒パンと魚をかじる。黒パンもポロポロ、塩魚も辛い。水で流し込む。飢えている身、三日分を一日で食い尽くしそうだ。しばらくすると塩魚で喉が渇く。各部屋から「ワダーダワイ（水をくれ）」の合唱が始まる。水と便所は一日朝夕二回しか行かせない。それがわかっているが喉が渇くと辛抱できなくなる。時間がたつと「便所に行かせろ」もまた始まる。便所行きが我慢できなくなると止むなく自分の靴の中へ用を果たす。腹具合が悪くした者も同様である。部屋の中が臭う。貨車が揺れる度に溢れて下の段へ垂れ、下の者の頭や荷物に降りかかる。下の者が怒鳴る。上の者は物が下へ落ちるのは当たり前だと言いつ返し、上下段の者の口論、取っ組み合いになる。監視兵が通路の金網越しに拳銃を突きつけおどし引き分けるなど、部屋の中は修羅場と化す。この貨車に一步踏み入れたときの異臭はこの総てが混じった臭

いである。この列車を同室の囚人は「ストロイピンワゴン」と呼んでいた。その語源は、一九〇六年（日露戦争一九〇四―一九〇五年終了の翌年）の革命萌芽期に、内務大臣・総理大臣として革命弾圧に辣腕を振るい、国民を震え上がらせた宰相ストロイピンの名をとって命名したものという（広辞苑による）。このワゴンはストロイピンのように革命に背いた囚人（反革命分子）を乗せる専用車ということらしい。他国にこのような囚人用お召し列車があるかどうかは知らないが、恐らく社会主義国ソ連ならでは経験できない乗り物ではなからうか。その後、鉄道沿線で度々労働をさせられたが、東に西に行く列車の貨車と言わず客車と言わず、最後尾には必ず一両から二両のこのストロイピンワゴンが連結されていた。それほど囚人が多く、移動も多いことを知る。

このストロイピンワゴンは、ポロポロの黒パン少量に塩魚を食わせ、喉を渴かせ、水を朝夕二回与えるだけ。便所へも朝夕二回。耐えかねて靴への用達の異臭。この拷問は筆舌に尽くし難い。乗せられた者でな

いと理解できないだろう。この世に地獄があるとすればこのような状態を言うのだろう。

二日目の午後、イルクーツク駅でこのワゴンの中から七、八人呼ばれ下車させる。小生もその中に含まれる。受刑者の中間監獄ということだ。鉄格子の扉をくぐり、監房の並ぶ廊下へ立たされる。日直将校が「荷物を預ける者は印を付けて出せ」と言う。ソ連の囚人はほとんどの者が預ける。小生にはこれという預け物はない。冬の軍服上衣と一日分の食糧を入れた枕代わりになっている袋だけであり預けなかった。

ソ連人三人の囚人とともに大きな監房へ入れられる。大部屋で左右両側に上下二段の棚寝台がある。先客は三十人くらい収監されている。我々が入るとその三十人の眼が一斉に注がれる。日本人はもちろん、東洋系の者は見当たらない。ソ連人はかりのようだ。これから先、奴らと行動をとにもするのだろうかと思うと心細い。

同室した三人のソ連人は、右側上段の隅に座っているソ連人の囚人のところへ何か物を差し出している。

知人でもいるのかと思つて眺めていた。その者はよく太った体格のよい男である。横柄な態度で受け取る。小生のところへ屈強な男が二人来て袋を出せと言う。拒否すると二人の男が力で押し倒し奪う。袋の中は岡部大佐からもらつた軍服上衣と命の綱の一日分のパンを入れている。奪つた袋は先ほど新入りの三人が物を渡した男の所へ持つて行く。その男は袋から軍服とパンと塩魚を取り、袋だけ投げて返す。腹が立つがどうすることもできない。他の囚人も見ているだけ。命を奪われなかつただけでも幸いと思う。郷に入れば郷に従え、生きるためには堪え忍ぶしかないと諦める。こんな所で命を落としては犬死以下だ。

監獄にはボスがいると同室したアルメニア人の言つたことを思い出す。このボスは絶大な権力を持っている。ボスから甘い汁を吸う子分どもが取り巻いている。彼等が獄内を取り仕切っている。監獄の管理者も大目に見て監獄の秩序を管理者側に有利なように保たせている。ソ連囚人がこの監房に入る前に荷物を預けたこと、監房に入るとすぐにボスのところへ貢ぎ物を

奉呈する行為、ソ連は囚人の国と言われるだけあつて国民が監獄の慣例をよく知っているのだらうと、感心するとともに恐ろしいことだと思ふ。見習うにしても小生には貢ぎ物は何も無い。子分二人降りて来て柵の先住者を詰め、我々四人に横になれる場所を割り当てる。小生は便槽の横で一番人の嫌う所だ。ボスと子分は二階の広い場所を占めており、先ほど奪つたパンと魚をかじりながらソ連式花札に興じている。生睡を飲んで見ているしかない。明日一日は欠食だ。ボスとして囚人に君臨する者、そのボスに取り入つて甘い汁を吸う者、何の抵抗もできない我々のような一般囚人、これぞ社会主義ソ連社会の縮図らしく、弱肉強食の社会である。

この監房内に飲み水の槽と便槽が置かれ、渴けば飲み、溜まれば用を足すことができる。それだけは楽だ。さきのストロイビンワゴンといい、この監獄の弱肉強食といい、ソ連囚人になるための洗礼祭であろうか。幾ら洗礼祭を強制されてもソ連の思うような心にはならんぞ。

夕方になると四人の炊事係りがスープを入れた樽を運び込む。花札に興じていた子分どもが素早く下りて汁の樽の杓子を取り、ボスの食器に樽の底に沈澱している中身多いところをなみなみと注いでボスのところへ献上し、次に子分の食器に同じように注ぎ、残りを掻き混ぜながら他の囚人へ分配する。我々新入りの者は携行食を明日までの分を受け取っており、汁の分配はない。眺めているだけだ。でもボスは日本人の食糧を取り上げたので同情してか「日本人に分配してやれ」と子分に命じ、汁を飯盒に少し注いでくれる。汁を啜っても腹はグウグウと泣く。監房内には日本人は一人、話し相手もなく孤独である。故郷の楽しかった思い出に耽るしかない。

この監房は水槽・便槽とも四斗樽であるが、三十数人が飲んで用を足すので、朝夕の取り替えまでには上水の槽は空になり、便槽は満杯になり溢れ床に流れる。取り替えは監視の指示である。扉が開くとボスが指名した二人が担いで監視兵に連れられて捨てに行く。樽が溢れる度に床や廊下にこぼれる。部屋の中は

異臭で満つる。小生の寝棚はこの便槽に接近していたので、満杯のときは勢いよく用を足す連中の飛沫が寝台に飛んでくるようで身を削られる思いだ。

十時消燈。壁の方を頭に寝台に横になる。電気が薄暗くなるとザーという音がする。雨が降り出したかなと思っていると首や耳や手足が痛痒くなる。経験上南京虫の襲撃だとわかる。寝台に起き上がって薄暗い燈で白壁を見ると、ゾロゾロと南京虫が下りてくる。チタ監獄の比ではない。多い。下がってくる南京虫を両手で潰す。白壁に潰した南京虫の血の痕が点々とつく。血の臭いに南京虫がさらに寄ってくる。南京虫の独特の臭いがする。白壁が赤く染まる。とても潰し切れない。隣のソ連人は子供の時から南京虫に噛まれることに慣れて免疫になっているのかサヤサヤと寝息を立てている。寝台から下りて飲料用の槽から水を汲み、床に径二メートル位の輪を画く。その中に長々となって寝る。南京虫は水を越えては侵入して来ない。乾けばまた撒く。朝までうとうととしていた。明六時に叩き起こされる。朝の点呼に壁の赤くなっているこ

とを日直将校に見つかる。誰がしたかと聞く。黙っている。と再度聞く。隣のソ連人が「日本人（ヤボンスキー）だ」と報告する。日直は小生を口汚く罵り出て行く。しばらくすると囚人の雑役係りが石灰の溶かした液を持ってきて壁の血痕を消すが、なかなか完全には消えなかった。ソ連の家屋の内外の壁は消石灰の水溶液に色粉を混ぜて塗る。擦れると付くが、修理が簡単である。

今日まで食事はない。点呼が終われば寝台に横になる。この監獄は日中横になっても何ら注意しない。昨夜の寝不足分を昼寝する。ボス連中は朝から花札に興じている。

囚人の中には、ブラトノイー（ならず者）、オール（盗賊・殺人・放火）等の刑を受けた者、これらのうち、雌犬のようにソ連当局に媚びへつらうスーカー、それに最も人数の多い政治犯等がある。ブラトノイーとオールの二者は凶暴で互いに権力争いで仲が悪いと聞く。政治犯の囚人は前二者に比べると紳士的であると言う。この監房のボスは前二者のいずれかだろう。

急に食事の差入れ口を開け、日直将校が偉い人の巡視がある旨を告げる。花札に興じていたボス連中は花札を隠し、寝台から下りて神妙な顔で床に立つ。しばらくすると監獄所長らしき者に案内され、地区の内務人民委員部の責任者、政治部将校、医師と思われる者が扉を開けて房内に入る。囚人は寝台に座ったままである。房内を見渡した後、責任者と思われる将校が「どうかね」と尋ねる。ボスが即座に「ハラシヨウ（よいです）」と答える。さらに「何か不満はないか、要求はないか」と尋ねる。ボスは「ニエット（ありません）」とまた答える。また「食事はどうか」と尋ねる。ボスが「十分です」と答える。次いで医師が「体具合はどうか、病気の者はないか」と尋ねる。ボスが「みんな元気です」と答える。一行は満足そうに領きながら房を出て行く。型どおりの巡視である。このとき房内のボスの存在が監獄側に必要なものであることを知る。管理者側に有利な回答をさせるために貴重な存在である。質問が終わるか終わらないかのうちにボスが発言し、他の者には発言する隙を与えない。この

茶番劇を見て、納得し去る巡視の連中も同じ穴のむじなだということを知るとともに、腹立たしい。

この監獄の中で気分よく生活している者は誰一人いない。要求も皆山ほどあり、食事にしても十分と答えるならなぜ他人の食糧を強奪するのか。もしボスが答えたとおり満足している者があるとすれば、ボスと取り巻き連中だけだ。この連中も移動すれば次は強制労働が待ち受けているので、保身のために監獄の管理者側に取り入って一日でも長くこの監房に居座りたいのだらう。

その晩は寝台から下りて、床の上に水を撒いてその輪の中へ寝る。空腹でなかなか寝付けない。水を飲んで辛抱する。眠れぬままに我が過ぎし二十八年の人生を思う。有為転変と言うが、これから先にいかなることが待っているのか、思うと暗澹たる気分になる。自暴自棄と凶太く生きるぞの二つの心が葛藤する。

三日目、昼寝をしているところを叩き起こされる。荷物を持って廊下に出る。集められた者の中には一昨日新入りした者が含まれていた。日直らしい将校が

「監房内に忘れ物がないか」と聞く。「一昨日入房したとき、上衣とパンを奪われた」と告げると、将校は監視兵に命じ上衣は取り戻してくれたが、引き裂いてポロポロにしていた。それでも襟に縫い込んでいた小林君の遺骨が返り安心する。

この監獄で二日分の糧秣をくれる。今度はトラックに詰め込む。先に乗った者の股の中へと順次座らせる。小生は女囚の股の中へ座る。栄養失調直前の体には色気は全然ない。何も変な気は起きない。イルクーツク駅までトラックに揺られる。この駅で再度ストロイピンワゴンに押し込まれる。今回は前回より若干空いている。上段の寝台に横になる。列車はあの駅この駅の引込線に入れられ長い間停車する。最上段であるため、鉄格子の小窓から限られた範囲とはいえ外の濃緑の野山が見えるのが嬉しい。ああシベリアも真夏になっっているわいと思う。小窓から入る空気を胸いっぱい吸う。強い太陽の光に照り返す青葉が眼にしみる。

翌日タイシエット駅に着く。ここでも長時間停車する。タイシエット駅はバイカル湖の北を通ってコムソ

モリスクまでの第二シベリア鉄道の分岐点であり、現在建設中であると聞いている。外で人の声や犬の鳴き声が聞こえる。警戒兵が迎えに来たらしい。イルクーツクで乗車した者はここで下車させられる。

迎えに来た監視兵と警戒犬にダワイダワイと追われる。犬を今にも噛みつくかと思うほど接近させる。駆け足である。長い間監獄に座っていたので息切れがする。ようやくベルシルカ（囚人中間集結地、ここから各矯正（強制）労働収容所へ配分する）の門前に着く。建物は高い鉄条網と高い板塀で囲まれ、四隅の望楼には監視兵が銃を構えている。門前で長時間座らせる。こんなに長時間待たせるなら途中あんなに急がせることはなかるうにと愚痴が言いたくなる。

門が開き一人一人呼名で中へ入れる。門内には受取りのボスが待ち受けて、それに引き取られる。ボスに連れられてバラックに行き、寝場も決まる。門前で長時間待たせたのはその割当てのためか。

寝台の隣のソ連人が「お前はヤポンスキーか」と聞く。「そうだ」と言うと、このベルシルカに日本人が

一―二人いると言う。懐かしく教えられたバラックに行ったが昨日エタツプ（移動）したと言う。残念ながら会えず。

ベルシルカは鉄条網で男囚部分と女囚部分に区切られている。飲料用ポンプ（手押し）は男囚側にあり、鉄条網の一方所に女囚専用の出入り扉があり、監視兵が監視している。水汲みにはこの監視兵が女囚を引率して男囚側に入る。

鉄条網を挟んで男女囚が話し合っている。同郷の者同士か、ここでの一目惚れか。彼女達はよく肥っていて体格もよい。監獄内で差入れがあったのか、金を持っていたのか。ウクライナ女性が多いらしい。同房したアルメニア人が話っていた強制移住組だろうか、同情したくなる。鉄条網越しの話で合意したのか、水汲みで男囚側に入った女囚が監視兵の目を盗んで男囚の所へ走り込み、下段の隅の寝台に毛布を吊るし睦言を始める。他の囚人も知らぬ顔である。お互いさまざまなかも知れない。ちょうど発情した犬のようである。女囚は次の水汲みに混じって女囚側に帰る。ソ連では

妊娠女囚は軽労働とか育児のために刑の一時停止制度があるとか聞いたことがある。そのための行為かも知れない。ベルシルカは毎日何人かの囚人が入り、何人かの囚人がどこかへ送られて行く。鉄条網越しの約束ごとでも速やかに運ばないとせつかくの据膳も食わぬうちに別れることになるかも知れない。

小生もベルシルカに着いて三日目には呼び出される。タイシエット駅までまたも監視兵と犬に追われる。駅で貨車に詰められる。移動囚人が多いのだから、今回は囚人専用のお召し列車ストロイピンワゴンでないのが気が楽だ。用便は貨車の中に穿った穴があり、いつでも用足しができる。

タイシエットから分岐、建設中の第二シベリア鉄道へと列車は走る。この鉄道は正式にはバイカル・アムール鉄道を略してバム鉄道と呼ばれる。シベリア第二鉄道はタイシエットを基点としてバイカル湖の北を通し、シベリア密林地帯を切り開いてアムール州コムソモリスカヤを経由してソビエツカヤガワニまでの鉄道である。現シベリア鉄道は中ソ国境沿いであり、戦

略上から安全な地帯に建設したものである。スターリン時代から囚人や捕虜（ドイツ人・日本人）の労働力で建設が進められ、日本軍捕虜が帰国のため出発した後、補充に我々囚人が労働力として投入された。タイシエットから北東三百キロの間で収容所を移動しつつ労働させられた。

北極海に流入するエニセイ川支線のアンガラ川上流ブラーツクには、東洋一と言われる水力発電所が建設された。この発電所施設は、満州国の水豊ダムが発電所を解体し、ソ連に運び込んで建設したものともいう。ソ連が発表している記事によると、若い鉄道技術者四千人によって十年間で建設したと一九八五年（昭和六十年）に発表している。一部にはそのような区間があったかも知れないが、終戦とともに抑留された日本人の多くの犠牲の上に建設されたものである。

当初下車させられたところは、タイシエットから百キロ余りのラーゲリで、鉄道沿いである。門に入られて、囚人の責任者らしい男から作業班に割り当てられる。班長はカザフ共和国カラガンダ近くの者らし

い。小柄で色の浅黒い人でカッシャーノフと言っていた。「ヤボンスキーお前はここに寝ろ」と、下段の寝台の一部を空けてくれる。ラーゲリに日本人が三、四人いることも教えてくれる。その日の夕、点呼は外で行う。八月はまだ明るい。日本人を求めてグルグル回って、斉藤元大佐と満州国警察官家来さんに逢う。初対面である。体には十分気をつけるように注意される。

翌日から仕事に駆り立てられる。朝七時に門内に集合し、作業所ごとに一人ずつ名前と自分の刑の該当項と刑期を声高に言いつつ門を出る。小生は「五十八条六項一号 二十五年 タナカ」と言う。門を出た者から五列縦隊に並ばせる。全員門を終わると、警戒兵の責任者（下士官）が人員を確認、日直将校から受け取る。責任者が作業場までの諸注意をする。①よそ見をするな。②会話してはならない。③五人ごとに腕を組め。④前の者に遅れるな。⑤列を離れた者は射殺する。等一気に喋る。最後に「分かったか」と念を押す。囚人が「ヤースノー（分かった）」と大声で言う。

警戒兵が前後左右に配置、そのままの隊形で前進をさせる。先頭の警戒兵が大股で歩く。遅れると「ダワイダワイ」と犬をけしかける。後尾の方はいつも走るようになる。皆後尾に並ぶのを嫌がる。初め小生も後尾について警戒犬に咬まれズボンを破られたこともある。鉄道線路の枕木の上を腕を組んで歩くのは歩幅が合わなく歩きにくい。ソ連人は背が高い。日本人は両側の者にぶら下がるようになる。重たいとソ連人が怒る。

仕事場に着くと線路上に座らせて、警戒兵はその日の仕事の範囲内の警戒位置に散り配備につく。夏はよいが、厳寒期に線路上に座ると冷えた軌条が綿ズボンを通して臀部が冷えてくる。痔の者は苦勞していた。このバム鉄道は当時、タイジェットから百五十キロくらいまで軌条が敷設されているということであった。

警戒兵の配置が終わって作業開始である。我々の班は軌条の枕木を三センチくらい持ち上げ、その下にバラスを押し込む仕事である。片側ずつ持ち上げ松板で作ったスコップで踏み込む。囚人の中の技術者らし

い者が兩軌条の水平を見つつ指示する。ソ連人は刑を受けてから即このラーゲリに送られて来たらしくまだ肥えて体力があるが、我々日本人は捕虜以来四年、体力も体重もない。人力での押し込みは重労働である。

ブリガジール（班長）とポモーションク（副班長）は巡回して労働の督促である。交互に枕木を上げつつ前進する。この鉄道を時々ゆっくりとした速度で貨物列車（ラーゲリの食糧や建設資材）や客車（さらに奥地のラーゲリの職員や家族か）が通過する。片方だけ上げているときは列車を停止させ、反対側が上げ終わるまで待たせる。

列車が通過するときは警戒兵は作業を中止させ、一カ所に集め座らせ身動きもさせない。逃亡予防らしい。客車が通過した後ソ連人が我先にと線路に走り寄る。何かを探しているようだ。小さな紙切れである。

この紙切れは乗客が用便後に使った紙で、糞が付いている。この紙はソ連特有の刻み煙草を巻く紙である。ラーゲリには紙がないので、その紙で刻み煙草を巻いて吸うためである。糞は水洗いしたりしていた。煙草

吸いという者はいろいろ苦勞していた。班ごとに、鉄道両側に排水溝工事、山を切り取ったり、埋めた斜面に芝張りの工事等もある。毎日同一工事をさせたり他の工事と交代したりである。

八月下旬になるとシベリアの朝夕は涼しさを越えて寒く、薄氷が張る。日中は暑く、蚊とブヨが跳梁する。その数が多いこと。作業する手に、顔に、唇に、ところかまわず瘦せた体の貴重な血を吸う。眼に飛び込むやつもある。鼻の穴にも集まる。息も自由にできない。二日目から布製の目のところだけ網になった袋を渡してくれる。袋を被っても首を締めないとそこから侵入し噛む。袋を被ると風が入らず、日中は暑く汗が流れる。眼の部分の網に集まるブヨを叩き潰すとその臭いでさらに集まる。シベリアの蚊やブヨは執拗である。

昼食はラーゲリから警戒兵に伴われて囚人が馬車で運んでくる。朝一日分の黒パン四五〇グラムは受領し食べたので、昼は塩汁だけである。囚人の炊事係が各班ごとに班長立会いで牛乳缶から熱い汁をアルミ

ニュームの食器に一杓ずつ分配する。汁で食器が熱く唇が焼けそうである。袋の前を頭まで巻き上げて汁を啜る。蚊やブヨが顔に集まるが、熱い汁の湯気でアルミ食器の汁の中へ落ちる。黒胡麻を振りかけたようになる。口を尖らせて向こう側へ吹き寄せながら汁を飲むが、次々に黒胡麻が増えてくる。空腹であり捨てるのももったいない。眼を閉じて一緒に腹へ流し込む。毒にはなるまい。

あるとき、作業中に何が原因か知らないが、ソ連人囚人と警戒兵が口論となった。囚人は裸にされ、後ろ手に縛られ足も縛られて立たされた。蚊やブヨがわんさと集まるところかまわず食らいつく。黒いロボットのようになり腫れる。囚人は痒さに身を悶えていたが払うこともできない。一時間ほどで縄を解かれたが、物凄く拷問であり気の毒であったが、誰も許しを乞うてやる者はいなかった。

ソ連囚人の話では、彼らがこのバムに投入された頃はまだ日本人捕虜がいて鉄道建設に従事していたと言う。酷寒と飢えと住環境の粗悪とノルマの加重で多く

の日本人が死んだ、その数は鉄道の枕木一本と日本人死者一人と同じ数だと言った。それほど過酷な労働と民主運動なる詭弁の下でソ連のために犠牲になったと言う。

日本人の抑留者の死についてM・V・ポクロフスキー少佐は「日本人は蠅のように死んでいく」と述べたという。またアメリカに亡命した大物スパイであるユーリ・ラストロポフは「捕虜の死亡率は余りにも不必要なまでに高かった。微量の黒パン・ジャガイモ・漬物だけという飢餓寸前の食事に加えて、最悪の衛生条件が各収容所の伝染病蔓延の原因となった。医療とはどんな病気にもヒマシ油だけというような原始的レベルだった」と証言している。作業が終わって帰るとき、腕を組んで枕木の上を歩きながら日本人の屍の上を歩いているようで、心の中で詫げる。

夕方作業が終わると監督が作業量を測る。その作業量が明後日の黒パンの配給量に影響する。全員一〇〇％達成は不可能である。班長が監督の査定した作業量を、ある者には一〇〇％以上に、ある者は一〇〇％

以下に各人ごとに分配して本部に提出する。その翌々日の朝、班長が誰それには（一〇〇％以上）大きなパン、誰それには（一〇〇％以下）小さいパンと分配させる。ソ連人の連中は「なぜ小さいパンだ。俺はよく働いたではないか」と抗議する者もいる。小生にはそんな自負するだけの働きもないし勇気もない。班長の覚えのよい者が大きなパンをもらうことになる。

作業が終わって帰るときも行きと同じ五列縦隊である。ラーゲリの門前で一人一人体に触れて検査する。凶器等の持込みを警戒しているらしい。夕食は囚人食堂である。炊事場の窓口に班長か副班長が必ず立ち会いし、受け取っていく班員と数を確認して他班の者が混入しないように監視する。夕食も塩汁一杯だけだ。時には底に穀物が沈んでいることもある。

朝作業出場後の残留組は不具者で、ごく限られた軽作業だけとなる。夕方作業から帰ってから全員の点呼がある。五列縦隊に必ず整列させる。日直将校が一（アジン）、二（ドブア）と一歩ずつ前に進ませて数える。縦隊の後尾に端数があると次の縦隊の先頭に連れ

て行き、その人数だけ並んでいる者を逐次後ろへ下がらせて数える。全縦隊の最後尾の端数だけを端数として加える。これが一回で収容総人員と合うことは稀である。二回三回と合うまでやり直す。夏は夕涼みの気分であり、冬の酷寒期は寒さが身に伝わる。ソ連では将校でさえこの程度の計算である。一般の者の程度は推察がつく。

ラーゲリ内は自由に行動できる。寝ようが他のバラックに行こうが誰も制約しない。日本人捕虜収容所のように政治運動もなく精神的には楽だ。同じ境遇の囚人である。これが我々囚人の世界なのだ。起床も作業集合も点呼も消灯も、皆ラーゲリ内の合図はレールの切れ端を叩いて知らせる。寝ると言っても着の身着のまま板の上に横になるだけ。今日も夢で故郷へ帰ろうか。ソ連囚人の中には毛布を携帯している者もあり、安らかそうに眠っている。

ある休みの日、無聊なので外で日向ぼっこをしていると、松葉杖をついた右足大腿部から下を失ったソ連人が近寄って来て「あなたは日本人か」と尋ねる。

「そうです」と応じると「私の部屋に來ないか」と案内される。エンワリート（不具者）のブラックである。自分の寝台に座らせ、砂糖少々と黒パンの小さな切れを出して「食べなさい」と言う。ラーゲリの給養では誰も空腹である。それを小さな切れとは言え見も知らない異国人に食べさせようとしている。量よりもその親切が嬉しい。情けに飢えているとき、目頭が熱くなる。ご厚意を頂く。食べ終わると、「これから私がソ連における囚人としてのラーゲリ生活の仕方を教えてやる」と言って、諄々と話してくれた。この人はウクライナ共和国出身の「ワルシヤフスキー」と言い、一九一七年の十月革命には十代で革命軍の一員として戦った。そのときに右足を失った。革命戦後は共産黨員として祖国のために尽力した。一九三八年トロツキストとして睨まれスターリンに肅清され、矯正労働二十五年の刑を受け今日までラーゲリで過ごしているとのこと。「私は祖国のために右足を捧げた。しかしスターリンはその恩賞として二十五年の監獄生活をくれた」と憤慨している。「ソ連という国は、その時

の権力者の意に添わない者は葬ってしまうということを忘れるな」と身振り手振りを交えて無念さを理解してくれと言わんばかりだ。ソ連人同士ではこんなことは話し合えないので、日本人なら密告の心配はないと思っただけの胸の中の鬱憤を晴らしているのかも知れない。大体上記のように理解した。以上の前置きをして、本人の十余年のラーゲリ生活の経験から次のことを守るよう諭される。

「あなたは何年の刑か」「二十五年です」、「あなたは達日本人は二十五年の刑を受けても決して落胆することはない。国際情勢の変化次第で必ず祖国日本の母のもとへ帰れる。我々ソ連人とは違う。ソ連国籍の者は、ソ連体制が変わらない限り二十五年間このような監獄生活をしなければならない。刑が終わってもシベリアに釈放されるだけであり、生まれ故郷のウクライナには帰れない。ここで死ぬしかない。日本人は祖国に帰るまで体を大切に生きて延びることだ。体を大切に生きて延びる方法は働かないことだ。ソ連のラーゲリは食糧で作業量を釣る。誰もこんな粗悪な食

糧で満ち足りる者はいない。みんな空腹だ。そこに眼をつけて作業ノルマで釣る。作業量一〇〇%以上達成した者には達成率に比例してパンの増配をし、反対に達成しない者からは率によりパンの量を減らし、その分を増配者へ回す。ラーゲリのソ連管理者側の腹は痛くも痒くもない方法でやる。少しでもパンを多くもらうために費やす体力は、増配されるパンのカロリーより大きく、かえって体力を消耗して死を早める。ラーゲリではパンを減らされようとなるべく働かないことだ。空腹に耐えることだ。体力を温存することだ。一切れのパンに惑わされるな。働くな。これが私がラーゲリ生活から得た結論だ。私は片足のない不具者のためラーゲリ内で比較的軽い労働に回されている。ほかの労働をする者よりパンの配給は少ないが体力の消耗も少ない。こうして十余年生きておれるのは失った足のお陰だと思ふこともある」と寂しそうに苦笑する。なるほどラーゲリ生活の鉄則だろうとありがたく拝聴するとともに見習わねばならぬと思う。

余談話になり「あんたはソ連に囚人が幾人いると思

うか」と尋ねる。「わからないが、バム鉄道沿線に一・五キロごと位にラーゲリが並んでいるところから推察すると相当数の囚人がいるだろう」と答える。と、「千五百万人ゝ二千万人、いや三千万人かな」と言い「恐らくスターリンにも分からないだろう」と言う。当時ソ連の総人口が二億三ゝ四千万人と言われていたが、十人に一人の囚人割りである。驚く数字である。あながち当たらずとも遠からずの数であろう。昭和六十三年三月十一日夜八時、NHKのテレビで西側ジャーナリスト報告として放送したソ連事情で、矯正収容所千七百カ所あり、西欧方面が密度が高いと言っていた。現在でも二千万人ゝ二千五百万人と言う人もいる。ソ連では囚人ばかりでなく、強制移住させられ、居住地を指定されその地以外には許可証なくして出ることができない人が多いと聞く。これらは半囚人である。それを加えると膨大な数字になる。

その後も時々逢って語り合い、ともにラーゲリの無聊を慰め合う。このラーゲリには凶悪犯の殺人強盗犯等は収容されていない。スターリンの反対派と目され

た者すなわち政治犯だけであり、その点囚人の中でも比較的紳士だが、中にはカーゲーペーの犬となつてゐる者もいるので、言動には気をつけるよう注意もされる。

後日談であるが、このラーゲリから奥地のラーゲリに移動させられワルシャフスキーさんとは別れる。昭和二十五年に日本人がハバロフスクに集合させられたとき、この集まつた日本人の中にバム鉄道建設ラーゲリでワルシャフスキーさんと一緒だつたと言う人があり、「マラドイチェロベーク（若者）タナカヒラオに逢つたら、『元気で国へ帰るように』伝えてくれ」との伝言を聞く。ラーゲリは囚人の出入りが度々あり、その中の一人が異国人のことを覚えていてわざわざ伝言までしてくれ感激する。ワルシャフスキーさんは今どうしておられるだろうか。あれから四十年余り経つ。あの人が予言したように我々日本人は世界情勢が変わつて祖国に帰ることができた。あのワルシャフスキーさんは覚悟されてはいたが、生まれ故郷のウクライナに帰ることなくシベリアの奥地で人生の終わりを

迎えられたであらうと思つと、やり切れない悲惨さを覚える。ご冥福を祈る。ワルシャフスキーさんが言つたように、ラーゲリ内で囚人同士の違いや持ち物の盗難は聞かなかつた。

あるときは鉄道工事の斜面の切り取り、一輪車に切土を積んで捨て場へ運搬する。ソ連の一輪車は鉄車輪で、小さな石や穴でも動かない。板を敷きその上を転がす。ノルマは各人の往復回数を副班長が記録し、仕事が終わつて集計する。その集計回数がソ連人自身が数えていた回数と違つて副班長と口論になる。どちらも譲らない。小生は何回したか数えもしない。彼等は明後日の配給パンの量に必死である。あるときは切り取つた斜面に張る芝切りをする。切り取つた三十センチ四角の芝を積んで夕方検収である。中の方は木を渡して空洞にして上だけ芝で覆うことを囚人が教えてくれる。真面目に仕事をする者はほとんどいない。ノルマをごまかすことをお互い教え合う。班長や副班長は見ても何も言わない。

ラーゲリに医務室があり女医が診断する。内科の病

気は医術が低いのでなかなか休ませない。それに引きかえ外科の傷等は誰が見ても大きな傷か小さな傷かはわかるので休ませる率がよい。二カ月に一度位全四人の身体検査を行う。全裸にして女医の前に立たせる。羞恥心を覚える。背を向けさせ臀部の皮を引っ張る。これで終わりだ。引っ張った皮膚の感覚で級を決める。ペールイ(一級)・フタローイ(二級)・トレーチイ(三級)、極度な骨と皮の者はオベ(軽作業)と機械的に決めていく。骨と皮だけの股が空いて後ろから牽丸が見えるまで痩せていてもほとんど一級〜二級である。小生もソ連人の頑強な新入りの囚人と同じ級だった。検査をしましたという言い逃れだけのものがある。極度の衰弱者は囚人病院へ入院休養させた例もある。

ソ連人の医師は、作業休みや軽作業者を出さないことが衛生管理がよく行われていることとなり成績が上がる。大体五千人収容のラーゲリでノルマの休業者数は三十人(〇・六%)で、そのうちラーゲリのボス四人五人が顔で休むので、一般の囚人労働者は二十五

〜二十六人であるという。重病でもその日の作業ノルマを超えてまでは休みを与えない。明日早く診断に来いと言う。ノルマに達しないまでに診断に来いということである。

入ソ直前に支給された服はぼろになる。修理する糸も針もない。しかし窮すれば通ずである。細い針金を拾い、昼食休みの焚火で一方を赤く焼き、線路の上で石等で叩き平たくし、その部分を鋭角に曲げ、その角の中央を針金に平行して碎石等の角で擦り減らし、また赤く焼いてその部分を反対側に曲げて碎石でこす。繰り返していると中央に小穴があく。これを五〜六センチに切り、針金の反対側を石やレールでこすり尖らす。これででき上がり。糸は毛布の縦糸を一本置きに抜く。一本置きに抜けば毛布はばらばらにならない。ぼろになった服はこの針と糸で修理する。でき上がりは、どうでもよく、穴から寒気が入らねばよい。小刀は、八番線か五寸釘を列車通過の待避する直前にレールの上に置く。列車が通過すると八番線や釘は平らに潰れる。これを石やレールにこすって刃をつけ

る。焚火で焼いて水や雪で冷やすとでき上がりである。針や小刀はソ連将校に見つかると没収されるので秘匿しておく。囚人間で自作の針一本と一日のパンツと交換する者もいた。

冬期作業には「ワースリンキ」というフェルト製の防寒長靴を履かないと凍傷になる。小生は持たないので班長がどこからか借りてきてくれる。足にボロ布を巻いて履く。靴が小さく足が締めつけられて痛い。大きな靴を要求したが「ない、辛抱せい」と班長は言う。やむなくその小さい靴でいつものとおり外仕事に出る。仕事をしていても足が冷たく痛い。焚火番をしている班長の傍らに行き靴を脱いで足を温める。夕方になると特に寒気が増して足が痛い。焚火は消えている、温めることができない。足踏みをしながら痛さに耐える。特に右足が痛い。その痛さも時とともにだんだん軽くなる。靴の爪先裏に雪でも付いたような感覚となり、振っても落ちない。仕事が終わわり帰途につく。だんだん爪先の雪が重くなるような気がする。バラックに帰ってフェルト靴を脱ぎ巻いた布を取ると、

右足先半分は白く氷のように冷たい。感覚がない。同囚が見て凍傷だと騒ぐ。外から雪を持ってきて右足の白くなった部分を交代交代でこすってくれる。凍った部分を溶かすことが先決らしい。班長も副班長も知らん顔をしている。同囚に負われて医務室へ行く。医師は即入院させてくれる。

患部に過マンガン酸カリ(戦前水に溶かしてうがい薬として使用)の濃い水溶液を塗り、包帯をしてくれる。その夜は感覚が返ったのか疼痛がして眠れない。足の甲半分切られるかも知れない。母に申しわけない(身体髪膚これを父母に受く、あえて毀損せざるは孝の始めなり)。足の甲が半分では歩きにくからう、品が悪いだろう等頭をめぐる。なるべく切断せずに済みますようにと念ずるとともに、その覚悟もおかねばと思ひ悩む。翌日も同じ溶液を塗る。右足の甲は全体が水泡になって膨れ上がっている。左足の形は変わっていない。左足は助かった。

三日目には疼痛も薄らいだが、水泡で膨れた皮膚が破れて汁が滴る。足を寝台から出して寝台下に容器を

受ける。治療は薬を塗るだけである。食事は班の同囚が運んでくれる。案外皆親切だ。感謝する。やはり政治犯であり、紳士的だ。四日目には水泡で腫れ上がった皮膚を切り取る。足袋を脱いだようでも下から赤い肉が出てくる。足の指も付いてくる。動く。切断することとはなくなった。内心バンザイと叫び喜ぶ。医者は何も言わない。赤い肉の上と同じ薬を塗る。汁は滴る。不具者にならなくてよかった。父や母や親族の方々の加護と感謝する。こうなると欲が出る。この寒い季節には外仕事に出たくない。一日も長く病院にいたいと思う。赤く見えた肉の上に薄い皮ができてくる。十日位で退院させられる。右足は火傷と同じく痕が残る。特に指は爪が抜けて生えないもの、残った爪の形も色も変わってしまう。今でも冬になると一番に霜焼けになって毎年悩ませる。だが切断せず残っただけでもありがたい。

この地で厳冬期に零下六十度を経験した。外気に触れると顔を針で刺されるように痛い。陽が照ると銀粉を撒いたように氷片が空中にきらめく（ダスト現象）。

風もない。作業場に出て焚火をしてもなかなか薪に火が付かない。空気が冷えて密度が高く、対流しないのだろうか。火が凍るとはこのようなことを言うのだろうか。これに風が吹けば、体感温度は百度を超えるだろう。

バム鉄道沿線は世界でも一、二の酷寒地と本で見えた。時には凄惨な雪嵐になる。鉄道が不通になることがある。囚人を狩り出して除雪させたりするが、一週間以上も通らない。貨車が停まれば囚人の糧秣は干上がらる。パンの代わりにニンジンを潰した塩気のない水炊きをお粥と言って配給する。お粥とは穀物で作るものと思っていたが、ニンジンだけのお粥は初めて聞く。穀物の三倍量を配給するとか言う。塩気のない赤いお粥を三食食っても、胃袋は膨れるが物足りない食後感でもある。塩分を全く摂取しないと三日もすると足が重く生気も失われる。五日もすると体がだるい、ふらふらする。塩分の貴重さを身をもって体験させられた。

一週間余り欠食後ようやく貨車が運行し、欠配のバ

ンも増量して配給してくれた。欠配のよかったことは、その間屋外労働には出ず、バラック内で寝台に横になって腹を空かせながらも夢想して過ごせたことである。

作業への出場時に一人ずつ刑の適用条項と刑期、氏名を言わせる。その名前に続けてヨッポイマーチ（お前の母を姦してやるとかバカヤローの侮蔑語）と言い、堂々と門を出る者がいる。皆が「わあー」と笑う。侮辱された日直将校も何も言わない。鈍感なのか、大らかなのか、気が長いのか。これが反対に日本人管理であつたらと想像する。作業への往復時に女囚の作業班と対面交差することがある。男囚は衰弱者が多いが、彼女等は肥満して健康そうである。同じ給養だろうが女は消耗が少ないのか。お互いに手でゼスチャーしながら卑猥な言葉を投げ合う。警戒兵が止めても聞かない。ラーゲリでもデマや流言飛語が巧妙に組み立てられて流れる。米軍が攻めてくるとか、米軍が我々抑圧されている者を救出してくれるとか、米ソ戦争が始まったとか。消えかけるとまた新しいデマが

流れる。わらをもつかみたい囚人心理に一喜一憂を与えて攪乱していく。カリマのラーゲリで暴動が起きて戦車が出動し、囚人の肉弾と戦車銃弾の対戦をし、ほとんどの囚人が殴殺された。中でも女囚が頑強に抵抗したという情報も流れる。どのような経路で入手するのかわからない。ウクライナ人のワルシャフスキーさんの教訓に従って余り動かないことを自制しながら日々を送る。

ラーゲリには各種民族が集まっている。ウクライナ人の十八、九歳の青年も混じっている。この少年は、独ソ戦で独軍がウクライナを占領し、ソ連政権によって集団化させられたコルホーズ・ソフホーズの桎梏から解放され住民は喜んで独軍に協力した。欧州戦線で米英軍の攻撃により独軍がウクライナから退却することになり、若い青年達がウクライナを再びソ連に渡すなどベンドロという人を中心に反ソ・バルチザンを結成して戦った。彼は運悪くソ連軍に捕らえられ、反ソ分子として二十五年の矯正労働の刑に処せられたという。いまだ（一九四八年）多く反ソ・バルチザンがウ

クライナの地で戦っていると云っていた。本人は反ソの闘士であった。

また朝鮮人の青年も多く收容されていた。彼等は、日本の敗戦により朝鮮は独立を取り戻せると、進駐してくるソ連軍を歓喜をもって迎えた。しかし進駐したソ連軍はその日から占領地内で強盗・略奪・強姦をほしいままにした。本人の姉も家に侵入したソ連兵に強姦されそうになり、父母の止める嘆願もむなしく姉は家族の前で姦された。後日、姉は自殺。住民は戦々恐々とし家に閉じこもっていた。これでは救世軍と思つたソ連軍は強盗軍である。日本の植民地の方がよかつたと言う者も出た。若い青年が集い自衛団体を結成し、朝鮮人の臨時政府等に非人間的行動をやめさせてくれるよう申し出たが、反対に逮捕され、反ソ分子としてソ連に引き渡され二十五年の矯正労働に処せられたという。

他の朝鮮人青年は、ソ連沿海州地区の森林伐採のため二年間という約束と賃金も高額で募集があり、村から半強制的に指名された。沿海州の現場に着いてみる

と、募集条件とは雲泥で衣食住いずれも粗悪で、賃金は安く食費等差し引かれると残りはなく、条件が違つと管理者と交渉したが全く進展がなかつた。二年間の辛抱と不満を耐えたが二年を経過しても朝鮮に帰さないで、再三帰国させるよう申し出たが聞き入れられず、ストライキを打つたところ、反ソ分子として二十五年の矯正労働の刑に処せられたと、ソ連不信を叫んでいた。これらの不当なソ連の措置について義憤を感じずにはいられなかつた。

敵しかつた冬も過ぎる、終戦後捕らわれてから五年が過ぎる。今年こそ今年こそと帰国を焦りながらよくも生きてきたものだと思う。こんな地獄の社会でも人間は生きられるものだ。二十五年春頃、ソ連当局が「抑留日本人全部を送還し、残っている若干名は戦争犯罪人として取調べ中の者である」と発表したことを仄聞した。その後ハバロフスクに日本人が集結した時、発表は次の通りであることを知る。

昭和二十五年四月二十二日ソ連政府がタス通信を通じて発表。「日本人捕虜送還完了。例外として、病人

九人、中共政府に引き渡すべき戦犯九百七十一人、戦犯あるいはその容疑者一千四百八十七人、計二千四百六十七人残留させている」その戦犯の内訳や刑期、なぜ戦犯なのか、どこへ収容しているのか、一切言及していない。我々も戦犯か、ソ連から見ればそんな大物に見えるのかと苦笑する。

この発表を母や親族の者が聞いたらどんなにか落胆するであろうと思うと、断腸の思いである。また実情を知らない郷土の人々は、戦犯になるほどどんな非人間的なことをしたのだろうと思うであろう。

——朔北会誌より——

「政治犯」とはどのような法規に触れて刑を受けた者を言うのか述べておこう。これは一言で言えば、刑法第五十八条、反革命犯罪の条項の適用を受けた者のことである。この五十八条というのが、第一項から第十四項まであり、第一項は五つに分かれていたから、全部で十八種類の行為が該当することになっていた。

すなわち、骨子にとどめることにして、次のとおり

(当時の大ロシア共和国刑法による)であった。

第一項 国及び政府を転覆、崩壊、弱体化せんとする行為はすべて反革命とみなす。

第一項 a 祖国への裏切り。すなわち、市民がソ連の軍事力・独立・または領土の不可侵性に損害をあたえる行為、たとえばスパイ行為・機密の漏洩・敵軍への投降・国外への逃亡。

第一項 b 右の行為を軍人が犯した場合。

第一項 c 軍人が国外に逃亡した場合、その成年家族員で裏切り行為の準備及び実行を補助し、もしくは知りながら官憲に届けなかった場合。

第一項 d 軍人が、準備中または実行せられた裏切り行為について届け出をなさないこと。

第二項 反革命の目的による武装反乱及びソ連領土への武装徒党の侵入、並びにソ連領の一部を暴力をもって分割し、中央または地方権力の奪取をはかること。

第三項 外国またはその個々の代表者と通謀し、もしくはソ連と戦争、武力干渉、封鎖の状態にある外国を援助すること。

第四項 国際ブルジョアジーに対する援助の提供、ま

たはこれらブルジョアジーの影響下に立ち、ないしは直接彼らによって組織された社会的グループ及び団体に所屬すること。(いわゆる「資本主義援助の罪」であり、他に罪名がつけにくい日本人を裁くのにこの条項が適用された。日本で生まれ、日本で育った日本人にである。)

第五項 外国または外国に所在する社会的グループと通謀し、ソ連に対する宣戦布告、武力干渉、その他の非友好的な行為をなさしめること。

第六項 スパイ行為、すなわちその内容上、特に保護を要する国家機密たる情報を外国、反革命団体または個人に交付し、盗取し、もしくは交付の目的で収集する行為。(戦前にソ連の地を踏んだことがある日本人にはこの項目が適用された。)

第七項 国家の施設または企業を利用することにより、もしくははその正常な活動を妨害することにより、国営の産業・運輸・商業・金融制度等を破壊すること、並びに活動を妨害すること。

第八項 ソビエト権力の代表者または労働者・農民の

革命的団体の活動家に対するテロ行為。

第九項 爆破、放火、またはその他の方法により、鉄道その他の交通路、通信機関、その他の国家的、公共的財産を破壊または毀損すること。(終戦の通知が届かず、二十年八月末まで国境山岳地によって戦闘を続行した機動第一旅団隷下の幹部将校は、この項に該当するとして刑を受けた。)

第十項 反革命犯罪を喚起するような宣伝、煽動をすること。

第十一項 国家犯罪に向けられたすべての組織活動。

第十二項 反革命犯罪を確知しながら届け出ないこと。

第十三項 帝体制または内乱時の反革命政府内にあって、責任ある、または秘密(スパイ)の職務にあつた者。

第十四項 反革命的サボタージュ。

【執筆者の紹介】

現住所 鳥取県八頭郡家町宮谷

大正十年二月九日生

軍歴 昭和十四年一月十日

昭和十五年十二月

歩兵隊第四〇
連隊入營
陸軍中野学校

入校

昭和十六年七月

関東軍情報部

配属

昭和二十年八月

興安省白城子

武装解除

昭和二十年十一月

入ソ ハバロ

フスク収容所

昭和三十一年十二月二十六日

興安丸 復員

現全抑協鳥取県連合会郡家町支部長

(鳥取県 松下 盛一)

私の人生

鳥根県 伊藤善隆

一、就職

昭和十五(一九四〇)年三月一日鳥取県米子市旧国鉄米子駅(現JR)に採用になり、朝六時発の列車に乗車すると石炭列車の箱型客車で黒煙を吐きながらタンガタンと毎日の通勤で米子駅には七時三十分に到着、八時から朝礼と点呼で一日の任務が伝達された。

現在は電車でスピードが要求され一時間で走る近代車両である。それでも当時から軍需景気で、安来市の旧安来製鋼所(現日立安来工場)に通勤する工具の皆さんで車内はいつも満員であった。昭和十六年十二月八日、大東亜戦争勃発とともに鉄道も軍事輸送で、現役、召集、志願兵の出発で毎日ホームは涙で別れる者、万歳万歳で笑顔で出征する志願兵のさまざまな姿を見て、私も数年後にはこの状況を頭に浮かべて勤務